

会 市 医 師 小 牧 苦
医 師
望 月 紘

パニック障害

突然襲ってくる奈落の底へ突き落とされるような恐怖、心臓は早鐘のように打ち、吸っても吸っても空気が肺に入っていない、冷や汗がダラダラ流れ、今にも気が狂ってしまいそうな、あるいは、死んでしまいそうな…。このような発作をパニック（恐慌）発作といいます。ほとんどの場合、救急車で病院に。不思議なことに発作は弱まって

勇気を持って精神科へ

発作の基準を満たし、発作が回復するものをパニック障害といえます。単なる精神的な原因だけでなく、体質的な影響が強い病気だということが分かってきました。特定の薬剤で発作が誘発されたり、僧帽弁逸脱症との関連が注目されています。発作が余りにも強いいため、発作の再発を恐れおののく予期不安が出現します。発作が続くと

きます。注射一本で嘘のようにケロリと治ることもあります。心電図、レントゲン、血液検査など全く異常なし。先生は首をかしげながら、自律神経失調症で神経性のものだから余り、気にしないようにと冷たく言うだけ。このような症状で悩んでいる方は決して少なくないはず
です。
国際的に決められたパニック

予期不安も強くなり、外出もままならなくなります。電車、バスにも乗れず、外出する際にもどこに病院があるのか確かめてからでないとは出かけられませぬ。社会生活上にも大変な支障をきたしてきます。
発作的に不安をきたす他の病気との区別が必要です。治療方法が当然のことながら違ってきます。そのためにも精神科医に

診断してもらった必要がありません。

パニック障害の治療は、まず、病気のメカニズムを説明し、必要以上の恐れを抱かせないようにします。その上でパニック発作に有効な薬を投与します。医師の指示に従って服用すれば、決して危険はありません。早く治療するほど良くなる率も高くなります。

人知れず悩んでおられる方はいませんか。勇気を持って精神科の門を叩いてみませんか。

